

「花嫁の父」

助任司祭 林 正人

六月、日本では梅雨に入り、うっとうしい天気が続く時期ですが、結婚式は、教会における式も含めて、グッと多くなります。何故なら六月は、古代ローマの女神で、結婚や出産を司るユノ（Junius）の月であり、この月に結婚する女性は幸せになれると言われているからです。皆様も“ジューン・ブライド（六月の花嫁）”という言葉は、ご存知と思います。

私は前任地の目黒教会や、居候していたカテドラルで、随分結婚式の司式をさせて頂きました。一日三回司式したことも、何回かあります。ミサによる結婚式（つまり、信者同士の結婚式）でもない限り、式次第の文言は同じ、説教も大筋は同じなのですが、新郎新婦にとっては一世一代の大舞台、こちらも同じ気持ちで司式していました。神様と参列者の祝福の中を、共に歩み始める若い男女。いつ見てもいいものです。

ところで、結婚式の主役は、もちろん新郎新婦ですが、もう一人、陰の主役とも言うべき人物が存在します。それは“花嫁の父”です。教会の結婚式では、基本的に父親が新婦と腕を組んで、ヴァージン・ロードを歩きます。そして祭壇前で愛娘を、奪っていくオトコに引き渡すのです。この時の父親の気持ち、男の私は、少し分かるような気がします。もし父親が亡くなっていて、代わりの方が一緒に歩いたとしても、恐らく花嫁の父は、天国から新郎に向かってこう叫んでいることでしょう。「この娘を泣かせてみる、タダじゃおかないぞ！」と。結婚式における父親は、喜び、悲しみ、愛、憎しみ（？）が入り混じった、文字通り万感の思いで、“妻”となった娘を見上げるのです。

教会は“キリストの花嫁”と呼ばれています。ならば、私たちの父である神様は“花嫁の父”とも言えます（同時に“花婿の父”でもありますが）。私たちが洗礼を受け、“キリストの花嫁”となった時、“花嫁の父”である神様も、万感の思いで、娘である私たちを見つめていたに違いありません。もしかしたら涙で目が翳っていたかも。私たちが洗礼を受けた日、それは父である神様にとって、正に“親父の一番長い日”なのであります。